

詩集『非在の者のバラ』（一）

一 憤怒の書

北 彰

すでに述べてきたように、詩集『非在の者のバラ』は、一九五九年から一九六三年にかけて書かれた詩五三編を収めた詩集である。その殆どは六〇年から六二年に書かれている。

この時期ツェランはゴル事件の真っ只中にあつた。支援してくれる友人たちと力を合わせながら、イヴァン・ゴルの詩を剽窃したとする誹謗中傷に対して、雑誌や新聞紙上で抗議や反論を重ねていったのである。

しかしそのうちツェランはその友人たちをも信頼できなくなっていく。自分を誹謗中傷する人間たちが反ユダヤ主義者であると信じると共に、友人たちも実は味方のふりをしてその実自分を裏切り敵の味方をしている——質の悪い——反ユダヤ主義者たちではないかと疑い始め、やがてはそう信じていくのである。

すなわち周囲の世界はそのすべてがツェランに対する悪意に満ちた「敵」と化したことになる。

そのツェランを友人たちはどう見ていたのか。

現実にはツェランの主張しているような反ユダヤ主義は存在せず、ただ単にツェランが神経過敏に反応しているだけであると見なしていた。あるいはツェランが被害妄想の精神病を発病したのではないかと疑っていたのである。

【義務として課した戦いと完璧な孤立化という帰結】

ツェランは「ヒトラーもどきを、沈黙したまま甘受することはしない、それが自分の義務である」と考える人であった。反ユダヤ主義と認めたものに対して何ら抵抗しないままでいることは許されず、「戦う」ことが自分に課された義務だったのである。ユダヤ人であるからというばかりではなく人間として人間らしくあろうとするなら反ユダヤ主義に抵抗することは人として当然の理であった。

しかし自分の言い分を百パーセント受け入れ信じる者だけを味方と考えるツェラン、わずかでも意に添わぬ対応すると相手を反ユダヤ主義者としてしまうツェラン、示された厚意を馬鹿げたことや悪意として片づけてしまうツェラン、こういったツェランと出会った友人たちはやがてツェランから離れて行かざるを得なかったのである。

その結果やって来たのは完璧と言ってよい孤立だった。

【悪の存在証明としての迫害妄想、悪のカタログ】

詩集執筆の最中、一九六二年六月一七日付ツェラン宛手紙の中で、ツェランの唯一無二の親友クラウス・デームスは「ツェランが迫害妄想にかかっていると疑わざるを得ない」と自分の最終的判断を告げたのである。この手紙を受

け取ったツェランはデームスと絶交した。友情が回復したのは一九六八年になってからであった。

精神の病、統合失調症の迫害妄想においては、迫害する他者の存在が仮定されている。受ける迫害の内容は迫害する他者がふるう悪である。「迫害妄想」はいわば人間の悪の存在証明になっていると言つてよいであろう。ゴル事件との関わりの中でツェランが陥っていく様々な妄想は、いわばツェランにおける悪のカタログとなっている。

すなわち嘘をふりまくこと、嘘で他人を傷つけ陥れながら自分は現世で名誉と成功を得ること、友人のふりをしながら陰で裏切り、つるみながら集団で一人の人間を攻撃し潰そうとすること、自分が一番大切に思っている一人息子エリックに暴力をふるいあるいは亡き者にしようとすること、等々である。

これらの悪の根源にあると考えられたのが「反ユダヤ主義」であった。キリスト教世界にあってなされてきたユダヤ人に対する社会的偏見と差別。その偏見と差別のもとなされてきたシヨアーに至る無数の残酷な行為。その行為を生み出した人間の内面に存在する「悪」、その「闇」。反ユダヤ主義をツェランは自分を迫害してくる元凶と見なしたのである。

【全世界を敵として】

自分は間違っていない。不条理極まりないのは外部世界である。敵意をむき出しにして自分に襲い掛かってくる世界に対して、全身を怒りに震わせながら、「自分こそが真実につく人間であり正しいのだ」とツェランは叫びをあげたのではなかったか。その憤怒の書こそが詩集『非在の者のバラ』であったと見える。

二 憤怒のいきつく先そして詩集の特徴

憤怒のいきつく先、それはどこであろうか？ 世界は不条理極まりなく、自分は故のない迫害を受けている。反ユダヤ主義という、人間が人間を差別する「悪」、それを陰に陽に認めている社会がある。このような社会の存在を許容し現実をこのような世界にしているのは何なのか誰なのか。

ツェランは東欧辺境の地に生まれ育ったとはいえ、そこはなおヨーロッパ世界の一角であり、ヨーロッパの歴史がもたらした現実が、ツェランにとつての世界であつた。

ヨーロッパの宗教、すなわち精神的な伝統の骨格はキリスト教である。もし神が存在するのならなぜ神はこのよきな現実の存在を許しているのか、ヨブ記におけるヨブの叫びが、精神世界におけるツェランの突き詰めた憤怒の行きつく先であろう。

ツェランは神にこの現実を嘆き訴え神と争う (*hadem*)。そして可能な限り神を冒瀆 (*aisem*) しようと試み、神への当てこすりをし、神を弾劾し、神に反逆し、神の存在を否定するのである。

詩集『非在の者のバラ』全体を通して聞こえてくる通奏低音は、この神との争いである。なおユダヤ教においては、神の存在は証明できず神の存在に疑問を抱くことは当然であり許されることだという。創世記第三章二九節には、「あなたの名はもはやヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。あなたは神と闘い、人々と闘って勝ったからだ」とある。イスラエルは「神と闘った」のである。

日本のような無宗教的風土と異なり、ヨーロッパは、小さな村に行っても教会があり、大きな街になればそれこそ

いくつ教会があるのかわからない。一日中どこかしらから教会の鐘の音が聞こえてくる。教会は俗世の秩序を形成し強力な力をふるう巨大な組織であり存在である。その果てしのない重さを持つ教会に一人抗うのは凄まじい精神的エネルギーを要することだ。日本で無神論を唱えてもおそらく殆ど何ら抵抗が生れないのとは対照的である。ヨーロッパにおいて神に抗うとは、俗世において教会の持つその果てしのない重さに抗うことなのだ。

詩集『非在の者のバラ』を貫く一筋の骨格は以上で示した通りである。

次に細部の輪郭を際立たせることで、この詩集の特徴を述べていこう。個別の項目を挙げて記述していく。

【はみ出した詩集】

詩集『非在の者のバラ』は、詩集『言語という格子』に続くものである。詩集『言語という格子』はすでに述べてきたように、ツェランが新しく見出した「灰色の言葉」によって書こうとしたものである。この試みに直接連続するのは、実は詩集『非在の者のバラ』ではなく、その次の詩集『息の転回』であるように見える。

すなわち前詩集からのなめらかな連続性を見せるといよりは、その連続性から「はみ出した」性質を持つものとなっているのだ。ユダヤ性への一段と強まる関心、マンデリシュタムを代表とするロシア文学への明らかな傾斜、ヨーロッパの文学伝統を生かした様々な詩法の試み、他の文学作品からの引用や地名・人名・歴史的出来事などを数多く取り込み詩の地平を広げていく様子、とりわけ最終第四章の様々なテーマを絡めつつ宇宙論的広がりまで至るそれ自体で完結するかの如くに見える長詩群の存在、これらが詩集の「はみ出した」性質を示している。

ツェラン自身、この詩集を、『言語という格子』と『息の転回』の間にある「間奏曲」であり、その二つの詩集よりも身近に感じられると言っていたらしい。⁽⁴⁾

詩集『非在の者のバラ』は、『ケシと記憶』を除けば、他のどの詩集よりも長い期間にわたって書かれた詩集であった。この時期に散文「山中対話」と、ビュヒナー賞受賞講演『子午線』が書かれていることには留意する必要がある。

【マンデリシュタームへの献辞】

ロシアの詩人オシップ・マンデリシュターム（一八九一年—一九三八年）はユダヤ人であり、スターリン批判の故に迫害を受けシベリア流刑となり、いくつかの地を転々とした。精神に変調をきたし自死を図ったことも含め、その流刑の様子は夫に付き添って行を共にした妻ナジェージダが詳細に書き留めている（邦訳『流刑の詩人マンデリシュターム』）。マンデリシュタームはまた剽窃疑惑にも晒されたが、迫害に屈することなく自由な精神のうちに抵抗を貫いた。いわば「亡命者」としてパリに暮らし、反ユダヤ主義からの迫害にあっていると信じていたツェランは、迫害にあり「流刑者」となっていたマンデリシュタームにわが身を事寄せていたと思われる。

詩集『闕から闕へ』が、妻のジゼルに献じられていることを除けば、一人の人間それも一人の詩人に献じられている詩集は、『非在の者のバラ』のみである。詩集にマンデリシュタームのシルエットを載せる計画もあった。このようなツェランのマンデリシュタームへの並外れた傾倒は、当然のことながらツェランがマンデリシュタームの詩に強く惹かれ彼の詩を高く評価していたことを出発点としている。

ドイツ語の世界にマンデリシュタームを紹介したのはツェランであった。独訳のマンデリシュターム詩集を刊行している。北ドイツ放送で一九六〇年三月一九日に「マンデリシュタームの詩」⁵と題してなされたツェランの放送内容が、講演『子午線』の内容と多くの点で重なっていることは、ツェランの詩と、マンデリシュタームの詩とが内的に響き合っていることを示している。

マンデリシュタームの詩の特質やモティーフなどは、ツェランの詩と共通するものが多く、ツェランは彼を「兄弟オシップ」とさえ呼んでいた。ツェランがマンデリシュタームの未知の詩や散文の草稿の存在を出版社の年次刊行物案内で知ったのは一九六一年五月頃と思われる。自分の詩集をマンデリシュタームに捧げることが決断したのは刊行されたこの草稿を入手し読んだ後だった。

「マンデリシュタームの多くの遺稿が刊行された——、この数年ほくが読んできたものの中で最も感動を与えるものだ。石化、すなわち人間化。何らかの形でおそらく私も一人のロシア人なのだ」⁶とツェランがシュレーアス宛の手紙に記したのは一九六一年七月一日のことである。

ツェランの草稿や手紙にはロシア語で自分の名前を署名したものもあった。西欧の中心地の一つパリで反ユダヤ主義からの攻撃を受けていると信じ、孤立化を深め、友人を失うと共にパリが自分の居場所ではないと感じ絶望していたツェランにあつて、元来故郷のチェルノヴィツと近しく、マンデリシュタームに代表される東方ロシアや、東欧ルーマニアに住む友人たちへの傾斜が深まっていたのかもしれない。

この時期ツェランが数多くの詩の翻訳をしていたことも見逃してはいけない事実である。その中でロシア詩の占める割合は大きかった。

【削除されていたモットー】

刊行された詩集では表に出ることなく消えていったものに、当初各章につけられるはずだったモットーの存在がある。このモットーを改めて表に引き出すことで詩集全体の理解に役立てたい。

一 ダンテ『神曲』

ダンテは政争によりフィレンツェを追われた亡命時代に『神曲』を書いた。『神曲』理解は様々であろう。「ダンテのベアトリーチェへの愛が、一切のものの根本である神の愛に高められ、地獄では絶対の正義として、煉獄では絶対の謙譲として、天国では絶対の平和として示現する過程を叙してゆくところに、詩人の最大の目的があった」が、「同時に、ダンテが生きていた時代のイタリアの政治的現実への痛烈な批判と、どうあるのが国家と教会の正しい姿であるかを示した規模宏大な警世の書であることも否みがない」とする見解がある。ダンテに深い関心を寄せダンテ論を著していたマンデリシュタムは、『神曲』を「最も重要な当時の政治的パンフレットである」とさえ見なしていた。

この『神曲』からツェランは三箇所引用していたが、モットーとしてイタリア語原文で示していたのは、地獄編第三二二歌一二節「語るところ事実と齟齬なからしめよ」⁽⁹⁾である。三二二歌は裏切り者や反逆者などが氷の海に閉じ込められている地獄の最下層で歌われた。裏切り者は、ゴル事件をすぐさま想起させる。また最下層であるからには地獄全体を経巡りその最深部に至っていることを示している。全世界の悪が例示されたということだ。

二 ヘルダーリンの詩「ライン」

「……いかに苦難にあおうとも、おまえは始まりの時と変わらずにいることだろう……」、これが引用箇所である。⁽¹⁰⁾

ツェランが自らを奮い立たせるため引用したと考えられる。

付言すれば、この箇所直前の詩「ライン」第四連の冒頭には、著名な一節「純粹に生まれ出たものは謎だ。歌にさえその謎を取り除くことは許されていない」がある。ハイデガーが存在を巡る思考において取り分け詳しく論じた箇所である。⁽¹¹⁾ ツェランはヘルダーリンに深く親しんでいた。

三 ロベール・デスノスとシェイクスピア

ロベール・デスノス（一九〇〇年—一九四五年）は、シュールレアリスム運動に関与し名を知られるようになった。藤田嗣治夫人だったユキと暮らし、詩作のみならずジャーナリズム、ラジオ放送に関与、またシナリオ書きやシャンソン歌詞を作詞するなどして活躍。第二次世界大戦勃発と共に動員され、一時捕虜となったが脱走に成功、反ナチのレジスタンス運動に参加していたが、一九四四年ゲシュタポに逮捕され、戦後すぐテレージエンシュタット強制収容所でチフスに感染し死亡している。

「今日、デスノスが死の直前に書いた詩の一つを送ってもらった。ぼくはひどく心打たれた。デスノスが戦争が終わった数日後にテレージエンシュタットで死んだのを君も知っているとと思う⁽¹²⁾」とツェランはアルフレート・アンデルシュ宛の手紙に書いている。その詩「墓碑銘」をモットーにしようとしたのである。⁽¹³⁾ この詩の中でデスノスは、いわゆる一般大衆に皮肉で批判的な視線を向けるのとは対照的に、困難な時代の中でも自由であった詩人としての自分を示している。また同時に今生きている者たちが死者の記憶を意識的に留めることができるかどうかあやぶんでいる。後にツェランは「墓碑銘」と「最後の詩」を独訳して、エンツェンスベルガーが編集した『現代詩博物館』に掲載した。

シェイクスピアからはソネット七〇番⁽¹⁴⁾。番数だけで具体的な引用部分は示されていない。「君が非難されても、君が悪いせいだとは思わぬ、美しい人間は、いつだって、中傷の的になるからね」で始まり、「悪意はいつでも野放しだ。君の姿に悪の疑惑の影が差していなければ、君は、ひとりで、心の王国を支配してしまうよ」⁽¹⁵⁾で終わるソネットである。ゴル事件との関係を如実に表しているものと言えよう。

【民族への傾斜】

若い時代のツェランは、チェルノヴィツでユダヤ人差別を経験したとはいえ、ユダヤ人が力を持っていた街で育ったせいも、ユダヤの風習に従って生活していた家庭の出でありながら、自分がユダヤ人であるとの自意識はそれほど強くなかったと言われている。

そのツェランの意識を変えたのが第二次世界大戦におけるナチズム体験であり、父母をナチに殺されたことである。自意識とは別に世界が運命として与えてくるものがある。その理由は自分がユダヤ人でありユダヤ民族に属する人間であるという事実だった。また自分のアイデンティティが一体何なのか突き詰めていったとき、そこに現れてきたものもまた、自分がユダヤ人であり、ユダヤ民族の一人なのだ、という認識であった。

しかし民族とは一体何であろうか。民族の特性というものが一体存在するのだろうか。民族を通してしかアイデンティティは得られず、それによってしか自尊心と生きる力は得られないのだろうか。それをツェランは考え続けたのである。

その結果、詩集『非在の者のバラ』にはユダヤ的なものが以前にもまして公然と現れるようになった。ユダヤ的な

ものこそ自分がよって立つ場である、自分の詩が立つ場はそこを置いて他にないのだと、世間に対して公然と語るようになったのである。バルバラ・ヴィーデマンによれば、ユダヤ的なものが抵抗と結びついてくるのは、この詩集を嚆矢とするとい⁽¹⁶⁾う。

ツェランは「この詩集を引つ提げて世間に出ていく決心を下すまでほくは長い間ためらっていたのだ⁽¹⁷⁾」と述べていた。またこの詩集は「痛みを齎し、ペールを被されぬまま、ありのまま晒されてそこに存在している。二、三の人が、その全体は何だったのか、今なお何であるのかに気づき、何について書かれた詩であるのかに気がつくだろう⁽¹⁸⁾」とも。バツハマン宛一九六三年九月二一日付の手紙では「もし君がそう呼びたければこの詩集は危機の記録だ——しかしもし詩が危機の記録、しかも根源的なそれでないとしたら詩とは一体何だろうか?」⁽¹⁹⁾と記している。

【パリ悲歌の構想】

当初は詩集全体を三章構成で考えていた。結局は現在そうであるように四章構成となったのだが、一時は五章構成にまで膨らんだ。当初ヴァリス悲歌と名付けていたパリ悲歌を独立した一章とする構想があつたのだ。詩集を考えるにあたってこの構想が存在したことには注意を払っておい⁽²⁰⁾た方が良いと思われる。

ツェランはスイスのヴァリス地方に滞在していた一九六一年四月一日から、ヴァリス悲歌を書き始めている。同じ地方のラロンにあるリルケの墓詣でと重なっていた。刊行された詩集には第四部の長詩群の中にヴァリス悲歌あるいはパリ悲歌からの詩が挿入されている。「悲歌」という名称からもツェランの精神状況が推し量られるであろう。リルケのドゥーイノの悲歌も連想される。

【講演「子午線」との深い関係】

すでに述べたことだが、詩集『非在の者のバラ』執筆期間中にツェランはビュヒナー賞受賞講演である『子午線』執筆をしていた。詩論である『子午線』と、詩集『非在の者のバラ』とは深い内的関連がある。次章において詩を論じる際にその点を具体的に指摘していきたいと思う。

三 詩「賛歌」

詩「賛歌」は、一七編の詩を収めた詩集第一部の一四番目に位置する詩である。ツェランの詩の中で最も有名な詩の一つでありまた多く論じられてきた。「憤怒の行きつく先」が最も分かり易い形で示されている詩でもある。実は筆者が最初に触れ強く惹きつけられたツェランの詩がこの「賛歌」だった。詩集『非在の者のバラ』を論じるにあたって真つ先にこの詩を取り上げる所以である。

賛歌

私たちを土と粘土から再び捏ね上げる者は誰もいない、

私たち塵に息を吹き込むものは誰もいない。

誰も。

讀えられてあれおまえ、誰もいないということよ。

おまえのために

私たちは花咲こうとする。

おまえに

向かって。

一つの無

であった私たち、無であり、無であり続ける

私たち、花咲きながら――

無の――

非在の者のバラ。

魂の明るさを持った花柱、

荒れ果てた天の花糸、

緋の言葉で赤くなった花冠をつけて

私たちは歌った

棘の上で、

おおその上で。⁽²⁰⁾

この詩の中には荒れ果てた風景、「天の荒地地」が広がり、その荒廃した状況「にもかかわらず」、無 (Nichts) が「一本のバラの花として」まるでまだ美しいものであるかのようにして「立って」いる。審美的観点からするならば、無は美的な一つの仮象であり、それ自身が一本のバラの花として無に抗って立っているのである。言語矛盾であり、パラドクシカルな行為なのだが、花は自身一つの無でありながら、無に拮抗し「抵抗」して美しく立っているのだ。

「無」が「無」に抗っている。このパラドックス。それは巨視的に近代以降の歴史を通観するならば、歴史の底を通奏低音の如く流れている決定的思想要素、ニーチェやカール・レーヴィットが「能動的ニヒリズム」⁽²¹⁾と指摘したものであろう。

(一) 詩をめぐって

【初出について】

詩が成立したのは一九六一年一月五日であるが、最初に発表されたのはフィッシャー書店年報一九六二年一〇号誌上だった。アンリ・ミシヨールの詩「コントラ」と、エフゲニー・エフトシエンコの詩「バービイ・ヤール」のツェラン訳と共に掲載されたのである。

「コントラ」は全世界に対する激しい拒絶を示し、「バービイ・ヤール」は、ウクライナのキーウ近郊バービイ・ヤールで一九四一年九月二九日から三〇日にかけてなされたナチによる三万人に上るユダヤ人大量虐殺事件を扱いながら、反ユダヤ主義を痛烈に批判している。この二つと共に詩「賛歌」を読んでほしいというのがツェランの要求であったことが分かる。詩「賛歌」を理解するにあたって実に分かり易い示唆であるといえよう。

【神の存在のラディカルな否定】

旧約聖書の「詩編」が「賛歌」の源である。「詩編」では勿論神の存在及び神に対する信仰が前提となっており、神に対する賛歌、神に対する敬虔な祈りが捧げられている。

ツェランの詩においては、ほめ称えられる相手は誰もいない。すなわち非在者であることは、神の存在のラディカルな否定である。

旧約聖書創世記第二章七節には「神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹きこまれた。人はこうして生きる者となった⁽²²⁾」とある。詩「賛歌」冒頭はこの記述を踏まえた上で、塵から人を形づくるもの、いのちの息を吹き込むものは「誰もいない」と断言し、その誰もいないことをほめ称えているのである。

「誰もいない」と訳したドイツ語原語は *niemand*、英語で言えば *none, nobody* である。この本来は代名詞の *niemand* が、詩の中でドイツ語特有の用法により擬人化され名詞化されるのである。存在していない者、非在の者が名詞として存在するようになる。その不思議な存在感。詩集のタイトルでもある *Niemandstose* と真つすぐにつながっている。

【バラの器官——いのちの生殖】

花柱はめしべの柱頭と子房の間の柱状の部分であり、受粉する器官である。花糸はおしべの葯を保持する柄の部分であり、バラのこれらの器官は性的メタファーとなり、生殖も表している。花冠は花卉の総称でありバラの花全体を表している。

新たな命が生み出されていく場合はしかし「荒涼として荒れ果てている」。しかもそれは天そのものなのだ。「荒れ果てた地に変じてしまった天において、壊れやすいはかない花糸、その細い糸に神の生存、神の生き残りがかかっているのかもしれない」⁽²³⁾。

【緋のいづば、あるいは王のいづば】

草稿では、「緋のことば」が「王のことば」となっていた。新約聖書マタイ伝第二十七章二八章から二九章には「そしてイエスの着ているものを剥ぎ取り、深紅の外套を着せ、茨で編んで頭に載せ、右手に葦の棒を持たせて、その前にひざまずき、(ユダヤ人の王、万歳)と言って、侮辱した」⁽²⁴⁾とある。

緋色は深紅であり、血の色につながる。シヨアーを想起させる表現でもある。「死の収容所にいるユダヤ人は無価値で取るに足らぬ存在としてあったが、しかしにもかかわらず、神に向かい合いながら、あるいは神に背きながら、花咲いたのだ」⁽²⁵⁾。「血のしみとおった緋のことばは王の如くに死者たちからやってくる。棘の上にいる〈私たち〉の姿と、茨の冠をかぶらされ磔刑に処せられている十字架上の、ユダヤ人イエスの形姿が重なり合ってくる」⁽²⁶⁾。

罪なき者がなぜ現世で苦しまねばならぬのか、ヨブ記の問いと一直線につながる問題である。

ツェランの詩「賛歌」は、キリスト教の神を弾劾しキリスト教の神の存在を否定している。しかしそれは単純な否定というのではなく、深く宗教的な、しかしどこまでも自己に執着し傲慢とも見える否定であり、神の存在の否定に向かつて限りなく漸近線を描く運動である。それは神の存在への痛切な希求の響きが聞こえてくる裏返し(27)の否定と筆者には見える。「詩の神は争いようもなく〈隠れた神〉である」⁽²⁷⁾とは、ツェランが講演『子午線』の草稿に書きつ

けていた言葉だった。

【なぜバラは咲くのか】

著書『根拠率 (Der Satz vom Grund)』において、ハイデガーは「なぜバラは咲くのか？」という問いに対するドイツ神秘主義哲学者アングルス・ジレジウスの答え「なぜという理由はバラにはない。咲くから咲くのだ、咲いている自分を顧みることもなく、自分が顧みられているかどうかを問うこともなく」を引用しながら、人間存在について論じている。⁽²⁸⁾ ツェランも所持し精読していたこの著作と、詩「賛歌」とを関連付ける人もいる。筆者は敢えて関連付けることをしないが、このジレジウスの答えは面白いと思う。

(二) ある日記と草稿から

ツェランが詩「賛歌」を書いたのは一九六一年一月五日である。三月二六日から四月六日までツェランは家族と共にスイスのモンタナにスキー旅行をしたが、その間にツェランはラロン、シエール、ミュゾットなどリルケゆかりの土地を巡っている。三月三一日にはモンタナのラロンの教会にあるリルケの墓に詣でていた。翌日からヴァリス悲歌を書き始めている。

ラロンのリルケの墓には有名な墓碑銘が記されている。「薔薇よ、おお純粋な矛盾よ、数多くの験のもとで誰でもない者の眠りであることの、喜びよ」⁽²⁹⁾。それが墓碑銘である。

墓詣でをした三月三一日のジゼル日記には、この日に書かれた詩が、詩集『非在の者のバラ』の一九番目の詩と

して配列されることが記されていた。すなわち詩集タイトルが『非在の者のバラ』と決められていたことが分かる。⁽³⁰⁾
 ヴァリス悲歌のためのメモを記した草稿の中に、一九六二年二月一八日と記されたものがある。

そこにはリルケの墓碑銘の詩の一部が、ヴァリスやシエール、ラロンなどの地名と共に記されていた。その下には、「プラハ、秘密の／運命の——／継ぎ手／またぼくの思考の」とあり、その下には「田舎医者」とカフカの短編の題名が記されていて、「短編から「傷」やバラに関わる単語「ローザ (Rosa)」を含む僅かな語句が書き抜かれていたのである。⁽³¹⁾

これらの書き抜きとツェランの具体的な個々の詩作品との関係をどう解釈するかについては推測の域を出ない。一義的に定められるものでもない。ただツェランが、リルケのみならず同時にカフカをも意識しているらしいことは明らかである。

ツェランにおけるカフカの存在の持つ重さ大きさについては、これまで何度も述べてきたところであるが、このようなメモを知った筆者は、筆者が予想していなかったここにおいてもツェランがカフカを意識していたことを知り、改めて大きな衝撃をうけたのである。

四 詩「彼らの中には大地があった」

詩集の中で最初に書かれたのは、詩集の中で二番目に置かれた詩「深みへ行くという言葉」である。成立順に並べるなら、この詩「彼らの中には大地があった」は二番目にくるはずである。それが最初に置かれている。そこには最

初に置くことにしたツェランの意図があるはずだ。まずは詩を示すことにしよう。

彼らの中には大地があった、そして

彼らは掘っていた。

彼らは掘っていた掘っていた、そのようにして昼が過ぎ、夜が過ぎていった。

そして彼らは神を賛美しなかった、

神は、と彼らは聞いた、これらすべてを望んでいたのだと、

神は、と彼らは聞いた、これらすべてを知っていたのだと。

彼らは掘ったそして何も聞かなかった——

彼らが賢くなることはなく、歌を歌うこともなく、

どのような言葉を話すこともなかった。

彼らは掘った。

風がやって来た、嵐もやって来た、

あらゆる海がやって来た。

俺は掘る、おまえも掘る、そして虫さえも掘る、

そして向こうにいる歌うものが言っている——お前たちは掘っていると。

おお誰かいるのか、おお誰もいないのか、おおおまえはいないのか、おおおまえよ——

どこにも行かなかったのだから、どこにも行きようはなかったのだろうか？

おおおまえは掘りそして俺も掘る、そして俺はお前に向かって俺自身を掘るのだ、

そして指には俺たちのために指輪が目覚めている。⁽³²⁾

【大地というイメージ】

大地は彼らの外部にあるのではない。内部にあるのだ。土の中を掘る、その掘り手の姿は、暗い地中の中を掘り進んで行くモグラの姿を連想させる。とにかく掘り続ける彼らに日は過ぎていく。地中であるから光は一切差し込んでこない。暗闇である。

自分がどこに向かっているのかも分からない。方向感覚はない。どこに今いるのかも分からない。これだけの労苦を払いながら賢くなれたという自覚もない、歌を歌うこともできずまたなんらかの言葉を見出すこともできないままだ。

闇の中で掘る作業が航海に転じ、今までの様々な体験が示される、嵐もあり嵐もあった、あらゆる海のあり様を体験したと。前にあるのはただ地中の闇。それはどこまで広がっているのか分からない、その地中の闇が海に転じてい

る。

【神への反抗、あるいは瀆神】

「神はこれらすべてを望んでいたのだ、神はこれらすべてを（あらかじめ）知っていたのだと彼らは聞いた」と記されている。闇の中でどこに向かって進んだらよいのか分からぬまま労苦だけが積み重なり時だけが過ぎていくこの状況、それらすべてを神は望み知っていたのである。

なぜ自分たちがこのような状況に陥らなければならないのか？という問いかけが自ずと生まれるであろう。詩「賛歌」とまさに共通するモテーフであり、ヨブ記のヨブの神に対する問いかけとつながるモテーフである。

次の連では、「彼らは何もや何も聞かなかった」とある。もはや神の言うことなど無視しているということなのか、神が彼らの運命について語るがなくなつたのか。

この詩の初出雑誌には、詩集『非在の者のバラ』からこの詩以外に二編、そして詩「賛歌」の時と同じくエフトシエンコの「バービイ・ヤール」の訳詩が掲載された。「バービイ・ヤール」が選ばれている以上、彼らの労苦・苦難のうちにはシヨアーの体験もまた入っているのであろう。

【詩が大きく二つに分かれていること】

この詩は過去形の時制で書かれ始め、詩全体の中で過去形が多くを占めている。それが現在形に変わるのには「俺は掘る」と訳し始めた部分からである。詩の分岐点を明示するために、また抒情的主体の「世界がどうあろうと自分は

やる」という世界に向かって投げつける激しい意志を明確化するために、筆者は敢えて「俺」という表記を選んでい

る。激しい意志と書いたが、いわばそれは子どもの叫び、この世界における絶対的自由を希求する、アナキーな詩人の無垢なるものの叫びである。

現在形には過去の歴史とは異なる未来を含む未来に向かう意志が含まれる。詩集冒頭でツェランはこの意志を表明したのではなかったか。ついでに言えば詩集最後の詩「大気の中で」の「大気」と「大地」を対照させ、詩集全体の枠組みとしたとも考えられる。

【マンデリシュタム】

詩「彼らの中には大地があった」が書かれたのは、一九五九年七月二七日。一九五九年一月にツェランはマンデリシュタムの独訳詩選集を刊行していた。一九六〇年三月一九日には北ドイツ放送でマンデリシュタムについて話している。

その中でツェランは次のように語っていた。

「人間はどこからやって来たのかという問いが、より差し迫ったもの、より絶望的なものになっています。詩に關するあるエッセイの中で、マンデリシュタムは詩を鋤と名付けていました。もっとも下層にある時（時代）の地層を掘り返して（時（時代）の黒土）を表に晒すのです。知覚されたものを言葉にする痛みを感じている眼

が新たな一つの力を得るのです——眼は幻視するものとなり、眼は詩を下降へと導くのです。詩人は書くことで他者なる（最も異なる）時（時代）へと近づくのです⁽³³⁾。

時が流れていく中で地面を掘ること、それは実は時（時代）を掘ることでもある。それがマンデリシュタームの認識であり、またツェランの認識でもあろう。

ツェランのマンデリシュターム独訳詩選集には、詩「おまえた姉と妹、重いバラと華奢なバラよ」が含まれており、その詩を北ドイツ放送の中でもツェランは取り上げ紹介している。その中には次のような一節がある。

「時（時代）の軛——この軛を打ち壊すために私は何をしたら良いのか？」「時——それが耕されて、バラとなり、それがいまや大地となった——。水の中で重いバラたち華奢なバラたちが渦を巻く——。二重の冠へと編み上げられていく重いバラたちそして華奢なバラたち⁽³⁴⁾——」

「重いバラ」の重さとは、実人生に絡まるもろもろ、そのどうすることもできない重さ。あるいはたった一度きり与えられた命の取り返しのつかなさ、そこから生み出される一回性の重さでもあろう。歴史の現実、その悲惨さもある。詩とはその現実から掬い上げられた壊れやすく優美でやわらかなもの、「華奢なバラ」である。リルケの墓碑銘にもつながり、詩集『非在の者のバラ』にも真つすぐつながっている。

「編み上げられていく重いバラたち」と訳した「編み上げられる」を、ドイツ語訳でツェランは geflochten という

単語を使っている。編み込まれる、という意味でもある。J・P・ペレは *eingeflochten* という単語が草稿で詩「彼らの中には大地があつた」のタイトルとしてまず考えられていたことに着目し、実はこの単語はマンデリシュタームの詩から取られたものではないかと考えている。つまり「自分の時代に編み込まれて」といった意味でこの単語を採用したのではないかと⁽³⁵⁾。

【闇——その詩論的考え】

詩で表現されている大地は、彼らの内部にあり、また「俺」の内部にある。抒情的主体が向かっている大地の闇を、詩論的にはツェランはどう考えていたのだろうか。

一九五七年一〇月に開かれたヴッパータールの文学会議で、結局なされることはなかったがツェランは講演を依頼され、その準備をしている。その講演タイトルは「詩的なものが持つ暗さについて」と題されていた。その講演のためのメモは後に講演『子午線』に生かされている。

この講演及び『子午線』草稿からのいくつかのメモは、ツェランの「闇」に対する考えを知るのに役立つと思われる。そのいくつかを次に記してみよう。

「詩は詩として暗い、それは詩であるがゆえに暗いのだ」⁽³⁶⁾「詩には、人間と同様、手が届く底はない。それゆえ、詩が詩として理解されねばならぬとしたら、我慢しなければならぬ詩特有の暗さがある。おそらくはまた——詩はその底を自身のうちに持っているのだ、その底と共に詩は底なしの中でやすらっている」⁽³⁷⁾「詩の暗さは発見さ

れたものではない。詩の発生時期から存在する暗さなのだ⁽³⁸⁾。「闇を愛することを学ばなければならない——闇を良しとしなければならぬ——黒い瞳黒い肌を愛するように」⁽³⁹⁾「闇——秘密——そこに現前しているもの、そこに対象物としてあるものの秘密」⁽⁴⁰⁾

ツェランは、書かれてそこにある詩は暗さに満ちたものだと言っている。その果てしない暗さに満ちた詩を詩人であるツェランは書こうとしているのである。投げ込まれた現実の状況の中で詩人は詩の言葉をつかみ開こうとする。

「そしてこの言葉によって、私はあの歳月の間、またそれに続く歳月の間、詩を書こうと試みてきたのです、話するために、自分の方向を定めるために、自分が今どこにいるのかを知るために、そして詩がスケッチした現実を自分に見せ、自分がどこに赴こうとしているのかを知るために」⁽⁴¹⁾。「それは現実に傷つき現実を求めながら、自分の存在と共に言葉へ向かう者が払う労苦なのです」⁽⁴²⁾とはツェランがブレームン文学賞を受賞した際に述べたことであった。

大地を、自分の内面にある大地を掘るとは、詩の言葉を求めて、大地の闇を掘り進んでいくことと重なるのではない。換言するなら ここにおいて闇（暗さ）は文字通り詩が生れるための必須の存在、母胎となっているのである。

【詩の後半部の晦渋さ】

この詩の前半は、伝統的な詩形をとり、しかも並列的に同じ表現が繰り返され、音韻構成が意識的になされている。

る。テンポよく律動的で理解しやすい。

詩集全体の解説において、「灰色のことば」との直接のつながりというよりはむしろ、「はみ出した詩集」として伝統とのつながりが表に現れる詩があると指摘した、その事例にあたる詩である。

これに反して、「俺は掘る」以降、動詞の時制が現在形に改まってからは、一転して詩は晦渋なものとなる。

「向こうにいる歌うもの」は男性名詞や女性名詞、あるいは複数名詞で表現される人間を示してはおらず、物や出来事を表す中性形で表現されている。人間とは認識できない何か別のものが歌っているということであろう。

「おお誰か一人はいるのか」以下はドイツ語原文で示すと、*O einer, o keiner, o niemand, o du:* となっている。実に律動的でテンポがよい。音の響きを再現できない詩の翻訳というものに改めて絶望感を抱かざるを得ない事例である。そして *niemand* という言葉。これは詩「賛歌」に現れ、また詩集のタイトルに現れる *niemand*、「非在の者」であり、詩集全体のモチーフに通じるものとなっている。

「おお誰かいるのか、おお誰もいないのか、おおおまえは存在していないのか、おおおまえよ」という叫びは、神を激しく切実に求めながら、神が非在であることのみが露わになるしかない、ツェランにおける現在を表すものであり、まさに詩「賛歌」に一直線につながるものである。

【対話としての詩】

そして最後から二番目の詩節。「俺はおまえに向かって俺自身を掘るのだ」とは一体どういった状況なのであろうか。ここにもツェランの詩論が関わってくる。

ツェランは詩の常に運動してやまぬ言語空間の中で、自己の前に〈他のもの、即ち他者・他物〉を置き、そのものと対話しようとするのである。「詩人から話しかけられたものが、話しかけてきた〈私 II Ⅲ〉の周りに集まり、〈おまえ II Ⅲ〉となる」⁽⁴³⁾。その私とおまえのなす対話が詩の言葉となるのである。「詩は——何という条件の下でしょうか！——まだなお知覚している一人の人間、現れてきたものに向かい合わされ、このまさに現れつつあるものに問いを投げかけ話しかけている一人の人間の詩となっていくのです——それは対話になっていくのです——しばしばそれは絶望的な対話なのですが」⁽⁴⁴⁾とツェランは講演『子午線』の中で語っていた。

このように対話を中心に据えて詩を書くようとしているツェラン。彼のこのような詩法は特異なものと言わねばならない。その詩法が詩「彼らの中には大地があった」のこの部分にも現れているのである。

【指輪と俺たち】

そして最後の詩節「俺たちのために指輪が目覚めている」という表現。この指輪とは一体何なのだろうか。

筆者がすぐ想起するのは、詩集『非在の者のバラ』の次の詩集『息の転回』第一部に含まれる詩「夢見られなかったものによってエッチングされ」の一節である。「眼を一つ一つの指につけて、私はまさぐった、そこを抜けることで、あなたに対して私が目覚めていることができる、一つの場所を指して」⁽⁴⁵⁾といった表現がある。また詩集『ケシと記憶』の中の詩「影の中にいる、とある婦人のシャンソン」の中の「彼は私の眼を指輪のようにして指につけた」⁽⁴⁶⁾という一節。

このような他の詩における表現、とりわけ詩「夢見られなかったものによってエッチングされ」の表現は参考にな

る。また「おまえ」に向かって自己自身の内部を掘り進むにあたっては、その掘り進んでいく方向を認識する必要がある。そのための認識器官が必要であろう。筆者が指輪を眼と考える理由である。

次に「俺たちのために」という訳について。

「俺たちのために」と訳したドイツ語原語は *uns*。この三格をどう解釈するか二通りの可能性が考えられる。所有を表す三格ととり、俺たち (*ich* と *du*) の指にはめられた指輪とする解釈。もう一つは筆者が訳したような解釈である。

Ich (私・俺) は、相手に向かって進み、*du* (あなた・おまえ) の存在を認識して、「対話」を求めようとしている。認識しようという能動的動きをしているのは *ich* (私・俺) の側である。そう考える筆者は、自分と相手の双方の指に指輪がはめられているのではなく、指輪がはめられているのは、相手を求める動きをしている *ich* (私・俺) の指のみであると考ええる。「俺たちの指に」ではなく、「俺たちのために」と訳した理由である。

【この詩を最初に置いた理由】

この詩もまた、詩集全体を貫くモチーフとして最初に指摘した「神との争い」を明確に示しており、詩集の最初に置くのにふさわしいからである。そしてまた大地、それは時代のメタファでもあるのだが、いまツェランが「編み込まれ」てその中で生きているこの時代は、その反ユダヤ主義によってツェランを迫害している。詩人はその迫害に抵抗していかうとする決意をこの詩で表明している。それもまた詩集冒頭に置くのにふさわしいと言えよう。

(この稿続く)

- (1) Paul Celan: Briefe 1934–1970, Suhrkamp, 2019, S.408f.
- (2) Paul Celan: Klaus und Nani Demus: Briefwechsel, Suhrkamp, 2009, S. 435.
- (3) 聖書、聖書協会共同訳、日本聖書協会、二〇一八年、(田)五二頁。
- (4) Alfred Kellner: Hermeneutik zu Celan, Deutsches Literaturarchiv なまむ 草稿を筆者が確認。Jürgen Lehmann (Hrsg.): Kommentar zu Paul Celans „Die Niemandsrose“, Universitätsverlag C. Winter, 1997, S. 35. を参照。
- (5) Ralp Dudi (Hrsg.): Ossip Mandelstam, Im Luftgrab, Ein Lesebuch, Ammann, 1988, S. 69–81.
- (6) Paul Celan: Heinrich Böll, Paul Schallück, Rolf Schroers: Briefwechsel mit den rheinischen Freunden, Suhrkamp, 2011, S. 221.
- (7) ダンテ・アリギエーリ『神曲 地獄編』寿岳文章訳、集英社、二〇〇三年、四九五頁。
- (8) Christine Ivanovic: „Göttliche Tragedie?“, Paul Celans „Die Niemandsrose“ von Dante her gelesen, In: Lesarten, Böhlau, 1996, S. 127.
- (9) 注(9)の寿岳文章訳にみよ。
- (10) Paul Celan: Werke, Historisch-Kritische Ausgabe, Bd. 6, Apparat, Suhrkamp, 2001, S. 27. 以下 HKA と略記。
- (11) 古田裕清『ハイネカーの詩人解釈とシュラーン』中央大学人文科学研究所編『シュラーンを読むとスラング』詩集〈誰よりもなる者の薔薇〉研究と注釈、中央大学出版部、二〇〇六年、一〇三―一六四頁。
- (12) „Fremde Nähe“, Celan als Übersetzer, Deutsche Schillergesellschaft am Neckar, 1997, S. 557.
- (13) Paul Celan: HKA, S. 37.
- (14) Ebd., S. 36.
- (15) シェイクスピア『ソネット集』高松雄一訳、岩波書店、一九九四年、九九―一〇〇頁。
- (16) Barbara Wiedemann: Jacobs Stehen, Jüdischer Widerstand in den Gedichten Paul Celans, Ulrich Keicher, 2007, S. 11.
- (17) Paul Celan: Neue kommentierte Gesamtausgabe, Suhrkamp, 2018, S. 783.
- (18) Ebd., S. 782.
- (19) Paul Celan: Ingeborg Bachmann: Herzzeit, Briefwechsel, Suhrkamp, 2008, S. 159.
- (20) Paul Celan: Gesammelte Werke in Sieben Bänden, Bd. 1, Suhrkamp, 1983, S. 225. 以下 G.W. と略記。
- (21) Karl Löwith: Der europäische Nihilismus, In: Sämtliche Schriften in 9 Bänden, Metzler, Bd. 2, 1988, S. 533.
- (22) 聖書、前掲書、(田)二頁。
- (23) George Steiner: Das lange Leben der Metaphorik, Ein Versuch über die „Shoah“, In: Akzente, H. 3, Juni 1987, S. 210.
- (24) 聖書、前掲書、(新)一五六頁。
- (25) George Steiner: a.a.O., S. 209f.

- (26) Ebd. S. 210.
- (27) Paul Celan: Werke, Tübinger Ausgabe, Der Meridian, Hrg. v. Bernhard Böschstein und Heino Schmull, Suhrkamp, 1999, Nr. 114, S. 87. 以上 TCAM の略記。
- (28) Martin Heidegger: Der Satz vom Grund, Neske, 1957, S. 86-89. フイリップ・ラクー＝ラバルト『経験としての詩』谷口博史訳 未來社、一九九七年、八一頁。
- (29) Rainer Maria Rilke: Sämtliche Werke, Bd. 2, Insel, 1957, S. 185.
- (30) Axel Gellhaus: Wortlandschaft, Konzeption und Textgenese bei Celan, In: Axel Gellhaus, Karin Hermann (Hrg.): Qualitativer Wechsel, Königshausen & Neumann, 2010, S. 31.
- (31) Ebd. S. 32.
- (32) Paul Celan: G.W., Bd. 1, S. 211.
- (33) Ralfp Duthl (Hrg.): a.O., S. 77.
- (34) Ossip Mandelstam: Gedichte, Aus dem Russischen übertragen von Paul Celan, Fischer, 1959, S. 41. 水上藤悦「〈深みに沈む〉——ツェラーンの詩作と翻訳について」ツェラーン研究第一号、日本ツェラーン協会、一九九九年、六三—九〇頁。ツェラーンの翻訳を巡って「マンデリシュタームを含め、鋭利で優れた分析に基づく翻訳論が展開されている」。
- (35) Juliana P. Perez: Offene Gedichte, Eine Studie über Paul Celans Die Niemandsrose, Königshausen & Neumann, 2010, S. 42.
- (36) TCAM, Nr. 108, S. 85.
- (37) Ebd. Nr. 123, S. 88.
- (38) Ebd. Nr. 120, S. 87.
- (39) Ebd. Nr. 868, S. 202.
- (40) Ebd. Nr. 866, S. 202.
- (41) Paul Celan: G.W., Bd. 3, S. 186.
- (42) Ebd. S. 186.
- (43) Paul Celan: G.W., Bd. 3, S. 198.
- (44) Ebd. S. 198.
- (45) Paul Celan: G.W., Bd. 2, S. 12.
- (46) Paul Celan: G.W., Bd. 1, S. 29.